

「読我書楼文章」翻刻研究(二)

—九州大学附属図書館蔵「吉村家文庫」の研究〔I〕—

荒木 龍太郎(活水女子大学名誉教授)

藤井 倫明(九州大学人文科学研究院准教授)

関 幹雄(都城工業高等専門学校一般科目准教授)

要旨

本稿は幕末維新期の陽明学者 吉村秋陽(名は晋、字は麗明、通称は重介・隆介、秋陽は号。一七九七—一八六六。広島藩支藩三原藩儒)の遺稿「読我書楼文章」の翻刻である。

キーワード

吉村秋陽、幕末維新期、陽明学者、広島藩、佐藤一斎

* * *

本稿は吉村秋陽の遺稿「読我書楼文章」(以下「文章」)の翻刻である。これは明治十五年に刊行された『読我書楼遺稿』(以下『遺稿』)の草稿であり、嗣子 吉村斐山(一八二二—一八八二)が「文章」から陽明学者池田草庵(一八一三—一八七八)の意見を参考にして約三分の一ほどの条を抄出し『遺稿』を刊行した。「文章」は『遺

稿』(巻三・巻四の詩は除く)の草稿である。

本稿は、「読我書楼文章」翻刻(一)—九州大学附属図書館蔵「吉村家文庫」研究〔I〕—九州近世儒学研究会「九州大学中国哲学研究会『中国哲学論集』第四十五号・2019)の続稿である。そこで既に翻刻を行っていた一部(一条〜二条)も、全体の書式を統一するために本稿の新たな書式で再録した。底本とする「文章」(九州大学附属図書館蔵1A22本)は、甲冊(四十一条)、乙冊(三十五条)、丙冊(二十六条)、丁冊(二十条)、戊冊(二十一条)、己冊(十二条)、庚冊(七条)、辛冊(二十六条)の計一八八条から成る。現在、解説、テキスト入力は全て終了しており、順次活字化を進める予定である。

「文章」は底本(吉村家文庫1A22)の他に四種の異本(吉村家文庫1A23、24、25、26)がある。おおむね成立時期に拠って配列するもの(吉村家文庫1A23本、上下二冊本)や、序・記・論・書・説・銘・跋・雑著といった項目毎に採録したもの(吉村家文庫1A25本、元亨利貞四冊本)があり、本稿でも校勘に使用した。秋陽の書簡の多くが「文章」に採録されているなかで、大塩中斎(一七九三—一八三七)への書簡が収録されていないことには注意すべきである。秋陽の大塩中斎宛書簡「大鹽先生左右」を参考のため本稿末尾に掲載しておく(『洗心洞割記』岩波文庫・p.46)。この書簡は、『読我書楼長曆』天保二年十一月十一日の記事にその存在が認められている。(『読我書楼長曆』翻刻(三)、活水学院日本文化学会『活水日文』63号、二〇二二年、p.99を参照。)

* * *

凡例

- 底本は、九州大学附属図書館吉村文庫所蔵『文章』（八冊（甲・辛）、秋陽撰、自筆稿本、請求記号 吉村文庫／1/A22）である。
- 活字化するにあたり、字体（新字／本字）は原則として底本の字体に依拠した。
- 底本において割注・小字注で表記されている箇所については、本稿では「」を用いて表記した。
- 読解の便をはかり、翻刻者の責任のもと句読点、中黒を付した。
- 底本 各丁の境は、／の記号を用いて表す。
- 虫損、その他の判読しがたい部分は□を用いて表記した。
- 底本における文字の加筆修正は校勘として注記する。特に断りの無い場合は墨筆による加筆修正とする。朱筆によるものはその旨を明記し
- 校勘で使用する異本は以下の通りである。以下に示す略称で略記する。異本にも収録される条については適宜参照し、校勘として注記する。
- 23本 Ⅱ『讀我書樓文章』（二冊（上・下）、秋陽撰、自筆稿本、吉村文庫／1/A23）
- 24本 Ⅱ『秋陽文藁』（三冊（上・中・下）、秋陽撰、斐山写本、吉村文庫／1/A24）
- 25本 Ⅱ『讀我書樓文章』（四冊（元・亨・貞）、秋陽撰、写本、吉村文庫／1/A25）
- 26本 Ⅱ『讀我書樓文鈔』（三卷、一冊、斐山写本、吉村文庫／1/A26）
- 『遺稿』Ⅱ『讀我書樓遺稿』（四卷（卷一〜四）、四冊、明治壬午（十五年）刊）草稿の中から五十条が抄出され刊行された刊本である。

○本稿で翻刻を行った条と異本との対照表を以下に示す。

- 1 底本 1 A22本 甲冊
- 01 「読韓非子」
- 02 「孟子説齊梁以王道其意如何 擬策題」
- 03 「書陸君為学論後」
- 04 「陸秀夫論」
- 05 「賀奥山弘平卜居序」
- 06 「与大佐」
- 07 ○「雨声楼記」
- 08 ○○「送藤條叔蘭西遊序」
- 09 ○○朱筆「雲山佳處楼賦「倣呉綺体以題為韵」
- 1 A23本 上冊01条（庚寅・天保元年）
- 1 A25本 元冊01条
- 10 ○○朱筆「送矢野千里帰省序」
- 1 A23本 上冊03条（辛卯・天保二年）
- 1 A25本 元冊02条
- 11 ○○朱筆「論明智光秀」
- 1 A23本 上冊04条（辛卯・天保二年）
- 1 A25本 亨冊23条
- 12 ○○朱筆「賀頼杏坪先生致仕序」
- 1 A23本 上冊05条 ○○朱筆（辛卯・天保二年）
- 『遺稿』卷之二 01条

13 ○○^{朱筆}「賀北尾孺人七十序」

1 A 25本 ○○^{朱筆}元冊 03条

1 A 26本 上冊 01条

遺稿』卷之一 09条

1 A 23本上冊 06条 (辛卯・天保二年)

1 A 25本 元冊 04条

※題上に丸(圈)が付されている条は「○」印を記載した。朱筆の圈はルビでその旨を示す。底本の圈の意味については甲冊07条の題下割注を参照。

* * *

01 讀韓非子 (甲冊 第一条)

余嘗察秦之始終、其興也、蓋穆公仁恕、百里蹇叔之諸賢、輔之以成其業。而及其亡者、則兆於孝公之用商鞅也。夫自鞅之法行、而無寸恩之結於人心也。上下相与若萍水、泛然唯利之視、而無所避矣。天下指為虎狼、則其虐威可想也。後至出亡而無所託、然後始知法之弊、而既莫及也。然秦猶不改其故轍、李斯再用之、而天下乃亡矣。而斯亦不免焉。嗚乎、非之死於秦幸也。不然、則鞅而已、斯而已、車裂五刑、死且有餘罪矣。夫任法用術、施之一国一邑、或似有一字之效。而以此欲治天下、則必不可得也。故廢諸侯、銷兵器、燔詩書、愚黔首、以為万世之固、而織隙一生、則土崩之勢不可救也。異

哉。恃以為治者、乃所以趣其亡也。而設令非得志、亦不過如是耳。余故曰、非之死於秦幸也。

02 孟子說齊梁以王道其意如何擬策題 (甲冊 第二条)

王者之職、在盡裁成輔相之道而導民於治安之域而已矣。雖夫守一官一役者、必成其事而受其祿焉。不然、則謂之素餐、不可以一日而居其位也。是以古之君於萬邦、居崇高富貴之極者、豈獨享其樂哉。億兆之衆、天下之大、責萃於一身矣。焦思窮慮、防乱於未萌、經綸周密、惟日不足。而猶且危懼惴惴、如無所容。然而有典有則、遺其子孫、使守之而不墜其業也。嗚乎、先王功德之光萃被後世者、其非為此之故歟。可謂盡其職而無慚者也。余觀戰國之際、文武之澤既竭、而周之政不復行乎天下久矣。諸侯力争、殆無虛日、暴戾之徒助其虐、而吞噬搏擊、虎狼其心、剗艾蹂躪、土芥斯民。牧民之職變而為仇讐焉。孟子生於其時、而救之之道既備於我、則固不得不任其責矣。故當世之君苟有可与言者焉、則必說以太平之策。及其言不終行也、乃曰、夫天未欲平治天下也。哀嘆而飯之天意耳。然其情之不能已也、又曰、吾日望之。譬之医、知其病之不可起矣、而豈有坐視而不藥之理也乎。是聖賢之心也。或曰、名分者治乱之要機也。此時也周室雖微、猶存其統。孟子說諸侯以王道、名分果何在也。曰能治天下者為天子、能治國者為諸侯。不能則謂之曠其職。曠其職、而

莫代之者、獨如斯民何。周王失職、天不君之者非一日也、則名分已廢矣。而民之塗炭方窮矣。將盡斃於鋒鏑也。亂至是、則當急之若救焚救溺、而尚恐不及焉。故豪傑之材、量其輕重而處之、不忍守區々名分而棄億兆之命也。況周末之君、碌々小人、使其得志、則何知其不為桀紂。獨以地小力少、而其惡無聞已。孟子之說未有一言及於周者、其意蓋可知也。夫孟子以伊周自任者也。故求湯武於當時諸侯。求之而不得、功竟無成。可惜哉。／

03 書陸君為學論後（甲冊 第三條）

易曰、翰音登于天。言無其實也。夫自言語文字之學盛、而天下之士氣、日趨卑陋。試語及古聖賢事業、性命仁義之旨、則若聞天樂、惘然莫覺焉。不然笑為迂腐、猶冰炭之不相入也。然而見其所事、不越嘲風雲狀月露、徒博強辨、求售、而其志則以積鏹為雄圖、聚錢為長策、畢生於此溺而不返。雖聲譽隆赫、攘臂於世者、率不能超其範圍也。摘藻之麗、結選之富、非無可觀焉。而奚以復望其當事矯俗乎哉。余初識陸君、爾時口尚乳臭、才粗志大、居常以為事無難為者矣、可一往而造焉。故眾人廣坐之中、刺々不能止、而視君則退然其容、／温言愉色、未見穎脫之可駭也。距今殆十年、恍若一夢。而余也多歷世故、稍有違素志、始覺其非、而後漸用力於內。然猶衣食所驅、妻孥所累、精^{（校1）}耗氣餒、動欲蹈流俗之弊、而道終不有以加也。今

茲君再遊我府。余叩其業、則示以斯篇。即知篤志力學與歲進、着眼之高、比世間滔々者、實星淵矣。所謂空谷足音、使人欣然。嗚呼、實學之將行於天下也、乃余深有待乎陸氏。而獨惡昔日之虛觀耳。

（校1）「精」の下、もと「氣」字あり。

04 陸秀夫論（甲冊 第四條）

昔者陸秀夫、當宋室顛沛、海濱播越之間、日為幼主講大學。後之議者以為迂腐不知務^{（校1）}也。余獨深思而悲其志焉。余嘗／觀宋氏之終始、靖康之奇禍、舉族沒胡塵。高宗南渡、纔繼殘喘於宗社蕩滅之餘、岌々乎危哉。而尚幸忠賢輩出、將相之任、不乏其人。是時也使之用賢任能、而固其根柢。然後徐起問罪之師、則雪不載天之大醜、還軫於舊都、以廓中興之業、與周宣漢光武比其隆、可措日而俟也。然寄託非人、一見誤黃伯、再見愚檜賊、屈膝於虜廷、而忘社稷之大計。忠義之士、吞恨就殄、幾何也。其不亡者為幸矣。孝宗中材、而不能有為。自光宗而下、昏庸愈甚。史彌遠・韓侂胄・賈似道之徒、相繼執國命、是咸充奸巨蠹、割剝國家者。而歷數遷延至百余年、而後絕其世者何歟。蓋太祖靖五季之壞亂、始知／崇道重儒、植國本已逾前代矣。子孫數世、克守其緒。於是前有二程、後有朱子、啓道統於既絕、聖賢大學之道、復明乎天下後世。天之引其祚者、不可謂為

此故也。陸之意蓋謂、今之天下唯此道不行焉、故事至于此。雖然古人有一旅一成而猶興者。詎知天誘其衷、輒虜一旦悔禍、或存趙氏之塊肉乎。庶幾血食一方、以漸至復其業、亦未可知也。然則導幼主者、可一日而不由此道耶。是所以戎事倥偬之中、猶且有斯舉也。況又非專耽學而廢當日之務哉。若夫議者之謗、余恐膠其迹、而未原其意。苟然乃其志誠足可悲耳。何咎之有也。／

(校1) 「務」、もと「豫」に作る。

05 賀奥山弘平卜居序 (甲冊 第五條)

自聖人之不起也^(校1)、世之為學者、不復同軌轍。苟焉隨其所便所好以為道、一是一非斷々如也。非無高行奇節可見、而至古者道德之指、則槩乎無聞也。降而迨漢之訓詁・唐之詞藻、專以器之卑々焉者。視道、形而上者、寔之於進取之外。嗚呼夫上何以紀政、下何以成俗。人道不變而為鬼蜮者亦幸焉^(校2)。我儒之衰、於是為甚矣。而其陋習至今存焉。獨程朱氏之立言設教、本之性命之微、而後施之經綸之大。內外精粗、詳審周密、循々不失其序、卓然遠接洙泗之流。爾來數百年、豪傑之士、羽翼斯文、有補於名教者、大抵莫不由乎其統也。^(校3)然則繼往世開來學之功、實萃于洛閩之諸賢。雖其間少^(校4)有可議者、而欲為真儒者、固舍此而何適焉哉。余嘗謂古人論德・行・言三者、以為德不可企及、而功与言或可能庶幾也。其言似矣。然功不由德、則富強之術。言不出於德、則邪說之徑。然則功与言亦囿於道德之^(校5)

間耳。故期以孔孟者、乃孔孟之學也。凡吾之所据而學者、果何道也。曰、自鄉人至聖人之道也。何與。夫人之生出於天、聖人与我同類者也。愚夫婦之知而行者、与天地位焉万物育焉、皆我分内而不得不竭力也。此則我友弘平氏之所樂而廢眠食也。弘平之學出於越智氏、々々々學出於尾藤先生。師弟俱窮道學之宗旨、而焜耀一世。斯文之不墜、實賴此輩之人矣乎。余時從弘平聞其緒論、因仰風采、猶且足立懦。弘平、日者寄萍跡於我方、僦居三間而居焉。苦學力行、安貧養志。余、平日既服膺汪信民之言、今又為弘平擊節嘆稱爾。

(校1) 「也」、もと「世」に作る。

(校2) 「幸焉」、もと「幸存焉獨程朱氏」に作る。

(校3) 「補」の下、もと「名」字あり。

(校4) 「有」の下、もと「議」字あり。

(校5) 「与」の下、もと「德」字あり。

(校6) 「弘平之學」、もと「道學」に作る。

注

○奥山弘平||名は操、字は存中、号は鳳鳴。伊豫の人。通称弘平。近藤篤山に師事する。『漢文學者總覽』一一四頁・一六八三番を参照。『文章』甲冊に『奥山弘平書』(壬辰正月・甲冊第十八條)、『答奥山存中書』(甲冊第三十一條)あり。

06 与大佐 (甲冊 第六條)

涼颼連日、蕩滌煩囂、羸疋如余尤覺爽快。未秋而燈火可親者、皆一雨之賜哉。想足下孜(校1)勉益加、課程日成緒、忻々。所示駱駝記一篇甚佳。粗改削數字句、不識中意否。凡文體、立名碎細、而要不出議論・叙事之二端。其間虛字與助語、乃巧拙之所係焉、斡旋須費(校2)工夫也。熟誦古文、則自知(校3)之。足下／肆業日猶淺、而既能如此。當奮躍以古人自期矣。毋安小成則庶乎。近日老先生眠食何如。伏祈致意。草々不乙。

(校1) 「孜」、もと「攻」に作る。

(校2) もと「費」字無し。

(校3) 「自知之」の下、もと「不俟口陳」四字あり。

07 ○雨声楼記「以下題上施圈者係一齊ママ先生所改竄」(甲冊 第七條)

人情之(校1)所欣暢自適而安焉者、謂之樂也。樂之所在不一、而其所趨各殊、淑慝於是乎分焉。蓋其為樂也、固無害乎日用居業之事、復因以為遷善改過之地。是則所以能享之於無疆、以篤其祐者、夫如此。然後可謂真樂也已。若夫耳目之欲錮其形、而心与之化、蕩然不知及也。累世之產、或一朝而掃地、親戚厭棄之、鄉黨誹笑之、則其始之以為樂者、適足以喪其身。豈可不知所擇耶。嘗聞、崎考畧西陲之一都會、庶且富、而國初／已來置互市之場、洋賣海舶、無歲而不至、殊種異產、珍恠之物、充物街衢、商旅之來聚者、旁午喧填。於是乎、

奢(校2)靡成風、楚其衣、玉其食、至諸玩好宴飲之具、無不佳(校3)好、淫哇嘈囂之音日夜不已。其盛自昔日為然。土豪高嶋氏、世管其市務、嘗造燕息之所、曰雨声楼。熊府澤村君士寬、与其主人善(校4)。頃間募同社記之。余初聞而恠焉。凡人之所名於物、率出其心之所樂。而主人已長乎紈袴之家、毫萃紛奢之習、目慣焉心安焉。其樂宜莫加於此。而今名之以雨、殆似乎樂林下間適之樂者何也。因叩之、則知好讀書、耽風騷、文雅之士到崎者、必相延應接交驩。嗟乎、余／雖未踐其地見其人、而其拔倫輩者可想也。宜矣、楼之得此名。而士寬之為之懇也。夫雨声之來、淋漓浙瀝、散者如琴、滴者如筑、鏘々然繚軒楹之間。主人時坐其中、囂塵頓銷、百念不觸乎懷。乃對薄書、治職事之未均者、暇則左右圖籍、与客譚古今論文墨、豈復有可易之樂乎哉。他日吾幸西遊、必将登斯楼、以問吾言之中否。而先之以記。

(校1) もと「之」字無し。

(校2) 「奢」、もと「奮」に作る。

(校3) 「佳好」、もと「佳品」に作る。

(校4) 「主人」、もと「人主」に作る。

注

○澤村君士寬||名は適、字は武左衛門・宮門、号は西陂。肥後の人。通称子寬・士寬・伯黨。佐藤一斎に師事する。熊本藩儒、時習館助教『漢文學者總覽』二一七頁・三〇一四蕃を参照。『文章』甲冊に『與奥山弘平書』(壬辰正月・第十八條)、『答奥山存中書』(第三十一條)あり。

08 ○送藤條叔蘭西遊序（甲冊 第八條）

出石藩藤條叔蘭、學於江都久矣。叔蘭青年、才敏而學博、尤優乎文藝。余与之共寢食數閱月、相得忻々如也。叔蘭一日愴然諗曰、遠遊我之志也。而日月逾邁、親漸老于堂。將今歷遊西陲諸州、廣訪名宿聞人、以求進益。子何以贈我。余曰、壯矣、遊豈徒哉。而今之言遊者、或不同也。未有一技之可進乎人者、而只往寒鄉僻邑、誇言虛喝、給富農豪戶、以為口腹之計。及技將窮、則又去而之他。是謂舖啜之遊。居積視時、彼此貿易、利之所在、遷移無常、孳々爭輸贏於絲毫、奔走道路以斃。是謂商賈之遊。斯二者、固不足言也。若夫梯山航海、名勝靈區、無遠不至、撫今古於風月、寓驩戚於藻詞、騷人韻侶之遊、然也。是其似矣。而吾儕之遊、則又有加焉。大抵此行、所過名都雄鎮、固不下數十處。而其所咨詢酬應者、亦應不止數百人也。叔蘭於是宜莫不盡心也。今夫以叔蘭之才之學、肆力於文藝、佗山之石以攻之、而充其所未足、當易々焉耳。然而我之所期不唯如此而已。蓋士之將有（校3）用於世、實有難矣。能不失乎小者、常恪守矩度、循行常途、逡巡趨趨、頃刻不敢忽之、其是也已。而猥覲樸遯之謗興焉。其至魁磊奇傑之材、好為大者、則又往々畧乎節目、而多瑕類、亦竟慊於衆心。是皆資稟之偏、而不能無憾者也。古之所謂成德達材、豈其然乎哉。自小至大、循々不失其序、而後乃至勲業掩世、声誉垂後。古不云乎、克勤小物。然則一言一行無非學。爾貌毋傲、而言必溫徐。爾心毋卑、而行必有方。多取諸人、而精擇諸己、聞見擴其識、事／故磨其才。叔蘭盡心於此、然後遊乃不徒然也。況

由茲而更進、則出焉可以當事也。處焉可以守身也。是謂小大兼能也。學之功其庶幾乎。余雖未能然、而志則有存焉。將與叔蘭共勉之也。叔蘭以為何如。（校5）

（校1）「過」、もと「適」に作る。

（校2）「佗山」の上、もと「取」字あり。

（校3）もと「有」字無し。

（校4）「己」、もと「心」に作る。

（校5）23本、本条末尾に「庚寅」の朱筆書き入れあり。

注

○藤條叔蘭＝櫻井石泉、名は苾、字は叔蘭、号は石泉、通称蘭五郎・三郎。但馬

出石の人。佐藤一斎に師事する。出石藩儒。『漢文學者總覽』二二三頁・二九

六四蕃を参照。

09 ○雲山佳處樓賦「倣吳綺體以題為韻」（甲冊 第九條）（校1）

人多逸韻、詞挾奇芬。畦苑平林、仲長統論樂志、曉猿夜鶴、孔稚圭寫移文。夫惟境與心交相契、神應物而不分。其有如此、亦方可云。胸中邱壑、筆下烟雲。豈必出塵埃之表、居鹿豕之羣。已哉、（校2）吾友鈴子。士林貴胄、奕葉崇班。衮々玄冠、夙了江湖之趣、（校4）煒煒形管、恒喜纂組之妍。爰營爽塏、徧占雲山。攬名勝於芳／節、（校5）湛優遊于退間。於是乎、擁髻堆螺、形且異長攢列、展翹擘絮、態不同而

往還。似翱翔帝闕、嘘吸仙寰。」^{ママ}爾乃連籤錦湘、富擬鄴侯之架、支床宝帖、珍誇海岳之齋。加鷗盟久訂、勝侶長偕。既設百尺之榻、豈無八義之才。咳唾成珠迸出、天葩衝口迭開。陶寫非賴絲竹、便娟那借名娃。^(校6)送觴漸久、柱笏尤佳。^(校7)至若春帳纒曙、攔花之眠未醒、晨曦放暄、翠羽之影交語。凝黛宛如、浮嵐容與。連東陵、廻北渚。或風颯爾吹古人、月皎兮照幽處。嬉々百年、悠々四序。」^{ママ}步兵之甕已足、陶合之田奚求。麗澤頻遇、盍簪屢畱、芙蓉之屋、薛荔之丘。嘗慕其境、今名是樓。即抱朴葆光之區、斯其足矣、信謝紛避俗之徑、亦可休歟。」^(校9)

(校1) 「題」の下、もと「五字」二字あり。23本・25本「題五字為韻」に作る。

(校2) 「其」、もと「共」に作る。

(校3) 「亦」の下、もと「可」字あり。

(校4) 「了」、もと「兮」に作る。

(校5) 「焯焯」、23本・25本「焯々」に作る。

(校6) 「娃」、もと「姓」に作る。

(校7) 「漸久」、もと「久漸」に作る。

(校8) 「柱」、23本もと「柱」に作り、「挂」に訂正。25本「挂」に作る。

(校9) 23本、本条末尾に「庚寅」の朱筆書き入れあり。

10 ○送矢野千里帰省序（甲冊第十條）

鎮西之為州凡九、限以大洋、而其間多名川巨嶽。西南秀靈之氣、

吐納沕鬱、実乃我神武發祥之區、而風化之所被、莫先於此焉。昔者嘗置太宰府於筑、而管海外諸邦之事務、使命往復、海舶輻湊。故文連之興、亦莫先於此焉。是以鎮西、自古称多人材。^(校1)試驗諸近世、耆儒碩士之出其地為不少矣。^(校4)北筑矢野千里、殆將繼此、而有成者也歟。君寓於司成林公之門教年、今茲將帰拜其親於郷也、^(校6)来乞言。余初聞君之才、而見其人、清癯茶然、若不勝衣。況静寡黙、一似無能為者。然而至其發於文詞、則言麗而思深、嚮慕甚正、連篇累牘、未嘗見窘束之迹。^(校7)其中之所有、可以想也。視之今世自負為才、輕儷傲慢、往々為識者之所厭棄。何惟星淵哉。嗚呼、君妙年既能如此。苟籍其所有、益以勉力不已、則他日所詣不可測。而今之既能者、未足以道也。夫交淺而言深、非情之所宜也。余於君交固淺矣。而以謂此學當与天下為之、何有於交之淺深。且也有志而才不足如余者、苟見他人之有其具、則忻然自不能已于言、^(校9)又何疑焉。庶幾君速来再就學、務致遠且大者、使世之士夫相語皆曰、西人之才果然也、則豈特為君之榮已邪。^(校10) /

(校1) 「材」、23本・25本「才」に作る。

(校2) 「試」、23本もと「誠」に作る。

(校3) 「諸」の下、もと「於」字あり。

(校4) 「士」、23本もと「使」に作る。

(校5) もと「北筑」二字無し。

(校6) 「其親於郷」、23本・25本「親於其郷」に作る。

(校7) もと「嘗」字無し。

(校8) 「所」の下、もと「謂」字あり。

(校9) 「于」、25本「乎」に作る。

(校10)「邪」、25本「耶」に作る。23本、本条末尾に「辛卯」の朱筆書き入れあり。

11 ○論明智光秀（甲冊第十一条）

乱離之際、教化絶迹、綱常壞斃、功利之念淪人骨髓。上以是御於下、々々以是視於上、叛服離合之迭變、存亡起滅之不同、率無不出于是。而偶有材(校1)力踰人者、亦皆沉迷陷溺、往々自速大戾矣。蓋時乃然、而生民之不幸莫甚焉。余嘗適洛之南、縱覽(校2)山崎戰場。蓋天正年間、明智光秀、与豊臣氏戰于此而不克、遂以亡。因徵之傳記、詢故老、得以審當日要害區域。然後一雄一雌之迹、歴々如接乎目睫焉。夫光秀行大事之日、所慮者獨豊臣氏也已。故先謀与藝人犄角之、又伏兵於途、出乎其不意。及既戰也、乃分兵占要地、隊伍有法、号令整肅。如斯(校3)／数者、皆兵家制勝之術、光秀能用之。且夫驅烏合觀望之兵、以當方強一倍之衆。設使常人處之、則一鼓且將不支。孰謂可以抗焉乎。而健闘半日、西軍殆蹶。初西軍之軍於山崎、声勢披猖、或請姑退拋于丹以竅變。光秀不听、其意蓋謂躬既負大逆、人心之所不与。或幸斃秀吉於此歟、天下猶(校4)可圖也。不然則死而已。而事不能成、一敗塗地者何也。猶有天道耳矣。乃知善兵者不必勝、而彼乱賊之徒、終不免於罰殛矣。夫(校5)當織田公之霸也、剛猛之士(校6)如雲、而其智畧相敵、邈乎諸將之右者、豊臣氏而止耳、明智氏而止耳。獨光秀特能而忮克。故不能懼而忍。是其(校7)所以釀滔天之惡也。而公亦既知之。屢因事折之、然則彼不弑公、々々必殺之。勢不能相久也。光

秀嘗征丹人而不能下、乃質其母而誘殺之。母因以死。嗚呼、貪功之至、投親於虎(校7)口不顧焉、則其無君之心、何待推刃於本能寺之日耶。吾今舉其可論者、而推其所以至於(校8)此者、実遇時之不淑、而不惟其罪也。功利之溺人、誠可畏而誠可憫也(校9)夫。

(校1)「材」、23本もと「才」に作る。

(校2)「覽」、23本もと「覓」に作る。

(校3)「数」、23本もと「教」に作る。

(校4)「猶」、脇に朱筆にて「猶」の書き入れあり。

(校5)もと「夫」字無し。

(校6)「士」、23本もと「志」に作る。

(校7)「虎口」の下、23本・25本もと「而」字あり。

(校8)「於此」、25本もと「此於」に作る。

(校9)23本、本条末尾に「辛」の朱筆書き入れあり。同本前条の朱筆書き入れ

「辛卯」を受けている。

12 ○賀頼杏坪先生致仕序（甲冊第十二条）

我藩耆宿杏坪頼先生、以天保紀元之春、請致仕。官録其功勞而允之。余時在江都、聞之(校2)竊為先生喜。因為之言曰、言語名色之不可以求道也、猶憲條文具之不可以(校3)言治也。其於道抑末矣。雖然、未能外(校4)此(校4)／而有所成、則為之有要焉。夫沂乎古之迹、而徵諸遺言者、貴得其心焉、得之矣。果以与我心冥合焉、則猶之我与古人會於一堂之上、胥擬議而商推也。如此之久、而智發慮出未嘗有窮也、斯

之為得矣。今之群然挾冊講誦者、比肩而立、疏經旨、談義理、辨博材藝、不乏其人也。而其志(校6)行既不足以稱焉。或偶承一官、而謬戾空疎、不能舉其職事者、往々是也。豈非以繁文不足啓其聰明、汨於拘泥牽制之陋、而日益進於無用也耶。是可嘆也。因此世輒謂今之持(校7)所學以從仕者、小則不過為童蒙課句誦、大則充顧問掌故之役而已。上之待(校8)士、既已非古、則士之趨卑下、豈獨其人之罪乎哉。吾以為是庸人浮沈於時者之言耳。君子之有得於道、確然自信者、固宜不如此也。故其間、有卓然行其所學、而不愧古人、如我(校9)先生者也歟。先生初亦在學職。一旦擢為郡宰也、其所治地方率在荒僻。田磽确而多棄地、居民鮮少、生理甚微、尤為難治矣。而先生為之撫字心勞、恐(校10)々然惟如不及。經營謀畫不愛其力、遂能扶植之。民於是乎安其居。而樂其業、怨(校11)咨息焉、頌聲興焉、惠恤之政達乎下矣。蓋先生自以名儒登仕藉、既數十年。前後功績不可勝記、則既與世儒之記典故、待顧問者異矣。況乎方今治平日久、財用不給、講利之徒爭進其說焉、勢位因以薰灼。於時(校12)先生獨立其間、撫字惠恤、鞅掌周旋、愈久而愈有驗者、則謂之卓然行其所學、不愧古人、非耶。至於今之致仕、亦可謂進退得其時、始終全其節矣。故余叙其喜、以為先生之賀。若夫學術文章、在天下之耳目者、則天下之人既為我藩賀之。余不必贅(校13)。

(校1) 23本、朱色の紙片貼付あり。25本「〇〇」の書き入れあり。本筆墨筆

(校2) もと「之」字無し。

(校3) 「以言」、25本もと「言以」に作る。

(校4) 「外此」、23本もと「此此」に作り、「捨此」に訂正。25本もと「捨此」に作り、「外此」に訂正。

(校5) 「所成」、脇に朱筆にて「所成」の書き入れあり。

(校6) 「志行」、25本もと「行志」に作る。

(校7) 「所」、脇に朱筆にて「所」の書き入れあり。

(校8) 「待」、23本「待」に作る。

(校9) 「古」、もと「故」に作る。

(校10) 「我」、25本もと「此」に作る。

(校11) 「恐」||もと「蛩」に作る。朱筆にて「恐」に訂正。25本もと「蛩」に作る。26本「蛩」に作る。

(校12) もと「民」字無し。

(校13) 「怨咨」、25本もと「咨怨」に作る。

(校14) 「藉」、26本「籍」に作る。

(校15) 「記」、23本・25本「紀」に訂正。26本「紀」に作る。

(校16) 「時」の下、26本「而」字の朱筆による加筆あり。

(校17) 「耶」、23本「邪」に作る。

(校18) 23本、本条末尾に「リ」の朱筆書き入れあり。同本前条の朱筆書き入れ「辛」、前々条の朱筆書き入れ「辛卯」を受けている。

注

○頼杏坪（一七五六—一八三四）、名は惟柔、字は千祺・季立、号は杏坪・春草・杏翁などと称す。安芸の人。亨翁の三男、山陽の叔父にあたる。天保五年没。

『漢文學者總覽』四七八頁・六五五一番を参照。『文章』乙冊に「與祭杏坪頼先生文」（第二十七条）あり。

13 ○賀北尾孺人七十序（甲冊第十三条）

孺人北尾氏、石田君伯孝之母。今茲某月日、值其七十懸悅之辰。伯孝遍乞言於諸友、而及於余。々惟寿夭貧富皆天也。人之於其間、或好焉、或惡焉。而至於得其所欲、則不能取必於己也。善者常得所欲、不善者否。此理之所當然、而大抵多反之。是又氣數之偶不得不然者亦天也。二者順受之而已矣。而世每有憾焉。於此夫係乎天者、既無如之何、則特竭人之力量可能為者而已矣。然今之人遇其當為也、輒委之於天、不肯致其力、則惑矣。人之得壽、往々存乎養。々之事固非一端。而要不過致夫心志之樂与口体之適也。吾聞伯孝之事孺人也、色必愉焉、容必婉焉。慎於言、而不詭乎行。扶持無時、遊不易方。温清之節、滌滌之具、必身當辨之。凡於養之道莫不至。而洞々屬々之敬、須臾不忘於懷矣。其用心勤且專矣。夫以伯孝之賢能養若此、而孺人日益康彊不衰。其天也者已兼之、而無憾焉。可謂幸矣。抑不識所謂天亦殆有繇孝思之誠以致之也乎。嗚呼、繼此而子若孫、能志伯孝之所志、而世人亦因此以知致力之積或可得於天、則介福之流乎後、宜無窮。而錫類之義、將見於今也夫。

(校1) もと「抵多」二字無し。

(校2) 「乎」、もと「於」に作る。

(校3) 「具」、もと「調」に作る。

(校4) 「莫」、23本・25本「無」に訂正。

(校5) 「若」、23本・25本「如」に作る。

(校6) 「幸」、23本・25本「孝」に作る。

(校7) 23本、次条（「警余録序」）末尾に「以上係天保二辛卯江都客中」の朱筆書き入れあり。

* * *

附録 「大鹽先生左右 吉村晉」

安藝後進吉村晉。謹奉書於大坂大鹽先生執事。晉聞、君子修辭立其誠。誠立矣、辭即修、意即達、感應之際、莫有凜乎遠近幽顯。苟然乎、夫山河千里之阻、何足道哉。晉一介書生、其於執事、固非有瓜葛傾蓋之素。又不待舊故先容之言。一旦率爾進言於左右、以常情言之、孰不疑且惑哉。而所賴特區區嚮慕之誠爾。伏惟執事留寬明之聽、毋斥狂妄幸甚。晉自幼知學、乃銳意進修。然而所期、則記誦聞見・辭賦操觚之習而已。進德居業、不知其爲何物、彌進彌陷焉。而顧存乎內者、則莽然荊棘耳。於是自懲自悔、始有志於君子之學、欲守先哲之遺訓、以求上達之功。而自憫資稟庸陋、加之舊習之難遽脫。支蔓繚繞、得一而遺二。皇皇徒苦、未能收纖介之效也。獨姚江之說、明快簡切。雖我輩下等人、亦覺少有實落下手地、私心竊喜。因更遊江都、入司成林氏之門、問業於佐藤一齋。居數年、則益聞所未聞。然後視方今學者之業、大抵我前日所既悔者。乃謂惡得豪傑之士、聰明特達、不逐時臭者。而從之遊乎、死且不朽矣。時或發之言議、則衆必笑以爲狂焉。今已三十餘歲。踽踽子立、守志草廬而已。往者仄聞道路紛紛之言、大坂有大鹽君者出焉。才識雋偉、學有根柢。而治獄立異績、人人積頌不容乎口。後復聞既致事、專心於學、卓然以道自任、欲一洗從前學者之陋。晉爲之奮興喜躍。吁嗟、天乎。當斯時而生斯人也。所謂聰明特達豪傑之士、非斯人而誰也。我道復古之機、將在於是矣乎。眞令人勃勃增氣、亦竊爲天下賀也。然躬猶多事故係累、未能直趨下風請嚴教。恨嘆無已。是以姑且通賤名、呈情素。而後將辯有所就正。所以犯唐突之誚而不辭也。伏冀西方之行李。若或○○○○、以慰區區之望、感戴何限。唯執事裁之。十一月望日。「吉村氏安藝人、業儒者、俗名隆助。」

*

*

*

[附記]

本稿は、令和三年度文部科学省科学研究費基盤研究（C）（一般）課題番号20K00066の成果の一部である。